

清太朗講演集第一輯

29



全東亞聯邦の建設  
皇道モンロー主義の宣言

印度獨立支援  
同盟理事  
護士

志波清太郎述

特247

503

20 セン

1



\*0010165000\*

0010165-000

特247-503

志波清太郎講演集

志波清太郎・述

興亜政治経済研究会

第1輯

昭和15

ABJ

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法第67条の規定に基づき、平成12年3月2日付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです。



特246  
503

第一輯內容一班

世紀の先驅者たる日本

世界の解放はアジアから  
モンロー主義とは何ぞ

所謂九國條約の正体

フランスの敗因に鑑みよ

世界の三分割、五分割

東亞聯邦の範圍と政治經濟體制

聯邦における共同國防

聯邦結成の指導原理

米國怖るゝに足らず

米に對日戰意無し

國策を謬まるものは誰ぞ

ソ聯封鎖と日獨伊同盟

日本よ、さらに前進せよ

近刊豫告

- 印度民族を救へ 【輯二第】
- 赤化防止の急務 【輯三第】
- 政治新體制原理解 【輯四第】
- 日本日の躍飛 【輯五第】

(以下續々發刊す)

全東亞聯邦の建設

皇道モンロー主義の宣言

志波清太郎述

世紀の先驅者たる日本

地球の上に、世紀の黎明が來らんとしてゐる、明日の世界新秩序建設がそれだ。

世界の歴史が始まつてから五千年、近代の資本主義的物質文明がうちたてられてより二百年、人類をして永いあいだ相互闘争と弱肉強食と侵略と征服と搾取と壓迫にと、あらゆる個人主義的罪惡へと驅りたてゝゐた十九世紀的自由主義が、天につばきする者が、自の面を汚辱することく、積年の積惡に自潰作用を起して、永遠に討滅されんとする今日の陋態を見よ。

前世界大戰の勝勢によつて、一切の不合理と不正義の名の下に強制されたヴェルサイユ體制と九國條



約は、西歐においては八千萬ドイツ國民の手足を緊縛し、四千五百萬のイタリーをして民族的飢餓を叫ばしめ、さらに東洋にては老大支那を英佛米の植民地と化せしめ、日本をも悲愴なる國際的孤立に陥し入れしめた。

かくて英國は地球上四分の一の領土と七つの海を支配することを得、フランスは歐洲第一の債權國となり、アメリカには世界の黄金があつまりドル貨の山を築いた。

十七世紀のはじめより今日まで、二世紀に亘る世界史とは何か？、それは悉く白人種族の世界侵略史に外ならぬ、アフリカ大陸の分割、中央アジア諸邦への侵略、印度および印度支那よりの掠奪、支那大陸への飽くなき蠶食、濠州と大洋州諸島の占據、ラテンアメリカ弱小民族よりの搾取——。

前大戦の終つた時、ウイルソンによつて提唱され、ロイドジョージ、クレマンソー等によつて機構された國際聯盟は、全世界に向つて高らかに全人類の自由と平等の恒久平和を約束した、しかるにそれは彼等侵略國家群の一層弱小民族より掠奪搾取せんとする一步前進にはかならなかつたのだ、而して、この自由と平和の美名にかくれて掠奪蠶食の爪牙を向けられたのが東亞大陸である、彼等は五千年の古き歴史を有する支那をその支配下に置き、東亞の一角を守つて毅然たる日本を制壓と窒息の袋小路に追ひ詰めんとした。

羊頭を假面した豺狼はやうやく全貌を現したのだ、日本はもはやきのふまでの彼等の友朋たり得ない時が來た、悲愴なる國際的孤立を覺悟してまでも彼等の飽なき慾望と甘夢を擊破して、地球上全人類のために正義と公道を宣布しなければならぬ、かくて國際聯盟の脱退となり、滿洲新國家の建設となり、ついで支那における抗日蔣政權の討滅、汪精衛一派を擁立しての純正中國政權の樹立となつたのである、この意味において日本の聯盟脱退、滿洲國建設は、單に日本もしくは東亞の一角のみに限られたる驚異と行動でなく、それは全世界の驚異であり、世界國家群に新たなる覺醒と行動の展開を促進せしめた劃期的のものであつた。

世界の人々はこれによつて始めて聯盟の無能と不合理を認識し、不正義なるヴェルサイユ體制のために苦惱してゐた被制壓國家群は一齊に蹶起するに至つた、以來歐州に風雲のごとく起つたドイツ、イタリーの行動は、いまさら説明するまでもなき明白なる事實である。

われ／＼は日本の聯盟脱退、滿洲新國家建設當時の日本の爲政者指導階級に果してどの程度の明智と認識を把持してゐたかを知らない、しかし現前に到達せしめた日本の行動そのものは、世界大改造に向つての先驅をなしたことは否定できない、これをしむ世紀の先驅者といはずして何ぞやである。然り、まさに世紀の先驅者たる日本の使命に自覺して東亞民族としての理想の彼岸に邁進しなければ



ならないのだ。

十億アジア民族の解放へ、アジア人のためのアジア建設へ、八紘一宇の皇國理想の貫徹へと。これが今日の日本に課せられた使命であり責任であり同時に運命でもある。

## 世界の解放はアジアから

今日は謂ふところの非常時であり、危機の時代である。

この時代においては、認識よりも行動が先立つ、われ／＼はながいあいだ自然は跳躍しないと云ふことをきかされて来た、これが近代科学の重大な原則であつたのだ、しかし文明の窮極するところに、必然的に異常なる飛躍がはじまる、科学はこれを辯證法といひ非連続といひ、ド、フリースの突變といふ要するに一つの終りが来、また一つの『はじめ』が始まらんとするのだ、現状維持の理的認識が揚棄せられて新らしき行動主義、生命主義の中より、より新たな認識が創造されんとしてゐるのである。古き秩序が終りをつけて、新しい秩序が始まるのである、舊世界体制の總崩れの内部より、さらに新らしき體制がつけられるのである、古き合理主義的認識論が棄てられて、生命主義的行動が飛躍する

言論よりはまづ行動である、常識よりは天才である、凡庸主義よりは英雄主義である。

然り、まさに近代主義の終滅であるのだ、而してこの近代主義の終滅こそ、すべてのヨーロッパ的なものゝ終滅であり、即ち世界史の一大突變を意味する。

われ／＼はまづこの世界史的の轉換を、時代の跳躍を、態度を改めて認識し、明日の世界を創造しなければならぬ。

日本が支那抗日政權討滅に三年を費してゐるあひだに、欧州におけるドイツは月餘をいでずしてベルギー、オランダを席捲し、フランスの首都を攻略しその本土の大半を占領してつひに軍門に降伏せしめた、世界は神速きはまるドイツの快勝の前に、たゞ驚嘆呆然たる有様である。

これはもとより日本の軍事行動の緩慢でもなければ國家勢力の脆弱でもなく、またドイツが軍事上經濟上日本より優れてゐるのでもない、わが戦線地域の彼に數倍せることも、地勢のきはめて險惡にして作戦の困難なることにも原因する、唯われ／＼の謂はんと欲するのは、この間日本の外交部が必然的に推進する世界の大轉換を明確に認識し得ずして、徒らに八方美人的追隨外交に日を送つて、英佛米ソの世界列強をして露骨なる援蔣政策をとらしめ、わが聖戰目的達成を困難ならしめた無爲無策を責めなければならぬ。



それにもかゝはらず、日本の軍隊は洋上幾百里を渡つて支那本土の大半を占領し、抗敵蔣政權を四川の奥地に追窮し、いまや斷滅の寸前に到らしめたことは、開戦三年を経て微動だもせぬ鞏固なる國力維持とともに、世界の大きな驚異となつてゐることだ。

しかし、いづれにしても歐州におけるドイツの快勝は、まもなく英本土の攻略にまで進展せらるべくドイツの歐州制覇はもはや決定的なものとなつてよい。

日没せざる大英國にも、つひい秋風落日の悲運が來たのである、この時なほ頑強なるイギリスは、或ひはカナダ遷都まで敢行して頽勢維持につとめるかも知れぬが、その暁の彼が勢力たるや昔日の面影なきは勿論である、わづかに米の後援をたのみに、大西洋を挟んで獨伊の攻勢を防禦するに吸々乎たるに止まるであらう。

このときにあたつて、彼が過去三百年に亘つて侵略したアフリカ大陸、中部アジア、大洋州、なかんづく東洋における印度、ビルマ、漳州、マレー半島、ボルネオ諸島の廣大なる植民地領土は如何なる運命に逢着するか、活眼もつて注視すべきはこの一事に歸着する、而してこの一大變化は決して遠き將來ではなくして、近き明日に起るべく約束されてゐることだ。

過去二世紀のあいだ、白人文明種族によつて塗りつぶされた世界地圖の塗替が、このときこそ完全に

行はれなければならない、しかもそれは二十三年前の歐州第一次戰の後に行はれたごとき、單に戰勝國家の領土的野心と征服感のみ満足さすための不合理不正義のものであつてはならぬ、それは當然世界の地理と民族の分布勢力、およびその民族の宗教と思想と民族性格まで考慮したところの、眞の全民族の解放であり、向上と平和と福祉と自由を永久に確保せしめるものでなければならないのだ。

こゝに近時世界におけるモンロー主義の擡頭をみるのである、地球上を幾分割せる聯邦制理想郷の建設を、二十億人類が安居樂業の地上天國の創成を！

ゆへにそれは獨りアメリカ合衆國の自由主義的個人主義の専有であり、傀儡であつてはならぬ、神より奪つたものは神の御手に返納し、アジアより侵略せるものを、アジア民族に還元せしめるものでなければならぬ、これぞ眞に世界の和平策であり、被制壓民族の解放であり、而していふところのモンロー主義精神の高揚實現であるのだ。

われ／＼は、いまこれを名づけて、全東亞聯邦の建設と呼ぶ。

## モンロー主義とは何ぞ！

しからは謂ふところのモンロー主義體制とは如何なる語義と思想と公理を有するものか、われ／＼は



まづ今日まで世界の各人によつて提唱されたモンロー主義なるものを検討批判しよう。

元來モンロー主義とは確然たる成文上の解釋はなく、一八二三年當時アメリカ大統領モンローが、南北アメリカ全州に亘つて合衆國排他的優越權を主張したる宣言に基くが、いまでは個人の名前をはなれて國際外交上の一テクニクとまでなつてゐる。

即ち、その主張するところは、アメリカは歐州のことに容喙せぬかほりに、歐州列國も米大陸に容喙し新たに植民地をつくるを排撃するといふにあるが、現前の事實は、アメリカ自身がすでにモンロー主義の本領をはなれて歐州の國際政治に干渉し、さらに米大陸における優越權を東洋までも延長して九國條約を成立せしめ、これによつて日本の國家民族的發展を阻止し、支那を列強の管理下に置かしめんとしたり、わが臺灣の對岸福建を中心として全支那に航空權を獲得したり、以て日本の國防をすら脅威せんとしてゐる、これが現實のアメリカモンロー主義の正體である。

アメリカ大陸より歐州勢力を驅逐することも、その容喙干渉を排することも、もとよりわれ／＼として異存のないところだ、しかし一方のアメリカ自身はさかんに歐州の情勢に干渉し、第一次歐州大戰には英佛側に參戰し、ついで大統領ウイルソンの提唱によつて國際聯盟を成立せしめたが、それが自國に都合わるくなると忽ち脱退して責任を回避するといふ狡猾なる態度を示した。

彼は九國條約を楯として、日本の滿洲國建設に反對し、いまなほこの國家の儼然たる存在を承認しない、しかるに自身はハワイを併合しフィリッピン、グワムを分捕し、さらにコロンビア國の領土を奪つて新パナマ國なる獨立國をもつくりあげた、これこそ彼がナバマ運河によつて兩洋を連絡し、歐州と東洋に支配權を振はんとするのみの野望に基くものであつて、日本が自國の生命線として滿洲建國をなしたのとは大いに事情を異にする、若しこの故をもつて、當時日本が米國の新パナマ國建設に反對干渉したなら、彼はいかばかり日本の干渉に赫怒したであらうか。

また彼がわが領土臺灣の對岸に航空權を獲得せるかほりに、立場をかへて日本がメキシコなりキューバなりに航空權を獲得したなら彼は如何なる態度に出るか。

さらに謂はん、現在米國は、日支事變中の日本に敵性を持ち、抗日蔣政權に對し義勇兵をおくり、クレヂットを設定して多量の軍需兵器を供給し、もつて露骨なる援蔣政策と極東英佛權益の擁護に奔馳しまた第二次歐州大戰には英國に加擔して對獨敵性を極端に發揮しあるに對し、日本が獨伊と盟を約し既にドイツによつて本土を失へる蘭領印度を占領せば如何、米國は果して彼の態度に倣へる日本の行動をそのまゝ容認するかどうか。

われ／＼は極めて卒直に言ふ、アメリカにアメリカ的モンロー主義が必要なれば、同時に東亞の守護



者たる日本にも、東亞モンロー主義の絶対に必要であることを、ラテンアメリカに米國を中心とするプロツクが必要であれば、東洋にも日本を中心とする東亞プロツクの必要であることを。

われ／＼は、もはやアメリカ大陸に對し、その門戶開放も機會均等も領土保全をも要求しない、そのかはりアメリカも、東亞の世界について干渉がましくしないことを要求する、アメリカ大陸に合衆國が儼乎として立つてゐるように、東亞の天地には日本があり、その安定勢力として毅然として存在せることを認識すべきである。

然らずして、アメリカがいつまでも東亞の新事態を認識せず、勝手氣儘なる東洋干渉を繰かへすならば、近き將來において英國勢力がカナダに逃避し獨伊がこれを攻撃する場合、日本もまた北部アメリカに百萬の精兵を送り彼の存立を脅威することあるべきを警告して置かなければならぬ。

### 所謂九國條約の正體

米國の太平洋進出、極東干渉はすでに一八二〇年ごろより始まつたものだ、アラスカを手中におさめハワイ、ヒリツピンを併呑した彼は、一八九九年には國務卿ジュンヘイの提唱にかゝる支那の門戶開放

決議となり、日露戦後には日本の生命線たる滿洲にまで觸手をのばして、ノツクススの滿洲鐵道中立提議ハリマンの滿鐵買収交渉、錦州の築港計畫等野望に及ぶるなき有様であつた。

それが第一次歐州大戰以來は一層積極的となり、支那に對しては各種の借款を提供するとともに幾多の利權を獲得し、なにかんづく所謂九國條約の締結をみるに及んで東洋における日本の膨脹を極度に抑壓してきたつた、これがやがて日本の滿洲建國に對するスチムソンの不承認聲明となり、近時露骨なる援蔣政策對日經濟壓迫にまで進展し來つたのだ。

この九國條約こそ、米國の東亞における對日干渉の金科玉條である、しからば九國條約とはいかなる理由と内容と過程をもつて成立されたか。

第一次歐州大戰後の一九二一年（大正十年）當時戰爭の慘禍にたいする世人の戦慄と、軍費過重による各國の苦惱を軽減せんがために、米國大統領ハーディングによつて日英米佛伊五ヶ國のワシントン會議が招請せられた、この時、太平洋及び極東問題に限り、五ヶ國以外に利害關係を有する支那、ベルギー、オランダ、ポルトガル四ヶ國を加へて締結されたものが九國條約である。

この條約は大體四原則を基礎として成る、即ち、

- 一、支那の主權並に領土的及び行政的保全を尊重すること



二、支那が有力にして且基礎鞏固なる政府を完全維持するため、支那に對し最も完全にして且最も障礙なき機會を與ふること

三、支那の領土を通じて一切の國民の商業及び工業上に對する機會均等主義を有効に樹立し且之を維持するため努力すること

四、現下の事態を利用して友好國の國民若くは人民の權利を減殺すべき特別の權利又は特權を獲得せざることを、並に友好國の安寧に有害なる行動を容認せざることを

この大憲章を原則として、支那に關する十四項目に亘る所謂九國條約が可決されたのであつた。

元來ワシントン會議の表面の名目は、日英米佛伊五ヶ國の軍備制限にあつたのだ、然るに老獪なる米國は、將來日本の膨脹發展を怖れてこれを束縛すると同時に、自國の權益を極東に延長すべく機會をねらつて成立せしめたものだ、しかも當時は自由主義的思潮は世界を風靡して居り、支那は日本の對支二十一箇條以來猛烈に國權回復を要求してゐた、米國は機敏に之を利用し表面支那の利益を口實にして自國の利益を企圖したのであつた。

日本はこの會議によつて、不當なる五、五、三の海軍比率を甘受せるのみならず、米國を脅威するとの猜疑をまぬがれたために、日英同盟をも放棄し、かつて米國が日本の支那における特殊權益を承認せる石井ランシング條約も廢棄し、パリ會議によつて有利に解決されてゐた山東問題すら英米の高壓的斡旋によつて讓步せざるを得なかつた。

しかも日本が、かくも多大の自國權益を犠牲とせるにかゝはらず、それによつて支那は果して幾何の幸福を得たか、成文の上でこそ彼は主權の獨立と領土の保全を得たが、以來二十年經過の事實は、ソ聯には外蒙を、英國には西藏を取られ、米國よりは幾多の對支投資の代償として權益を獲得せられ、主要都市の大部分は列強租界の支配を受け、一として獨立國家の面目を維持せるものがないのだ。

憐れむべし、支那は英米の甘言好餌に欺かれて、日本といふ善隣を失ひ、祖國をあげて歐米列強の共同管理的情態に置かれ、植民地的支配に甘んずるほかなきに至つた。

あたかも一群の狼が、迷へる小羊を圍繞して、これを監視しつゝ互にその掠奪の多からんことを競ふこれが九國條約下に置かれたる支那の現實であつたのだ、この弱者を救ひこれに眞正の獨立と自由と解放を與へるものこそ、日本の責任であり今次聖戰の目的使命である。

日本よ、何よりもまづ九國條約を否定し、この不合理と不正義を粉碎せよ、而して支那を植民地的支配下に置く歐米勢力の根據たる租界地域を支那自の手に返還せしめよ、是れ支那を救済し解放するため最大の急務である。



## フランスの敗因に鑑みよ

民主主義的自由主義による狭量なる民族自決主義は、過去において幾多の群小國家を簇出せしめたが實力なきところのこれ等小國が世界の大轉換の前に遂に維持し得ざることは最近の北歐ならびに近東諸國家の現状をみれば如實に證明される。

こゝにおいて第二次世界戦後、豫想せられるものは、かゝる群小國家の整理廢合とその聯邦制の建設である、いひかへれば聯邦ブロック制による世界の分割である。

この國家聯邦によるブロック體制については、第一次歐州大戦前後より歐州にては學者政治家の口よりしばしば唱へられたことがあり、その中には北歐におけるラトヴィア、リトアニア、エストニア等のバルチック小國をもつてする汎バルチック同盟論、ノヴィコフ氏の露國中心の歐州聯合論、エンリコ、フェルコ氏の英露をのぞく歐州聯合論、グーテンホーへ、カレルギー氏の汎歐州運動、ブリアン氏の歐州聯盟論と幾多の聯邦體制論が生じたが、いづれも實現をみるに至らなかつた。

その主たる原因としては、當時自由主義的個人主義思想が世界を風靡して、各民族いづれも自我の主張のみに固執没頭して互讓協同の精神が缺如すること、ヴェルサイユ體制なるものが戰勝國が戰敗國に

對して極端なる掠奪的壓迫を加へんがために不合理につくられてゐたこと、歐州の勝者たるフランスにも、なほ全歐州を支配する實力と氣魄に缺けてゐたことなどを擧げなければならぬ。

要するに對獨戰には勝つたが、勝つたフランスも、へト／＼に弱つてゐた、英國の尻押しなくては、到底一國にて歐州に君臨しえないフランスであつたからだ、ゆゑに彼は自ら勝者の地位に居りながら、敗戰獨塊の復讐戰を怖れること甚だしく、これを再起せざらしめんがために極端なる苛酷條件をもつて臨んだが、結果は却つてドイツ國民の反撥心に拍車して遂に今度の對獨戰に報復されたのである。

こゝにフランスの不徳不聰明なる失敗があつた、即ち彼には日本の如き皇道精神を持たず民族の共榮解放のための義戰によらず、また眞個の實力を擁せずしてすべてを他力に依存して敵を制せんとした當然の失敗がある、自己のみ歐州第一の債權國たる甘夢をむさぼり、友邦イタリーなどには些の利益分配もしなかつた貪婪に對する應報があつたのだ。

しかし今度ばかりがふ、ドイツの勝利は最早決定的であるのみならず、彼は將來とも全歐を制壓するに足るだけの實力を、その八千五百万の民族的團結と、世界一優秀なる科學兵器の上に有してゐる。

またヒットラーの聰明は、おそらく前大戦後フランスの失敗にかんがみて、今次の敗戰國に對しては極めて寛大なる處分をもつて臨むであらうし、盟邦イタリーに對しては公平の利益分配をなすであらう



ナチス精神はこの點、日本の皇道精神に多く學んでゐるに違ひない。さらにヒットラーの理性は、おの／＼の民族精神は武力によつては永久に滅し得られないことを知つてゐよう、故に彼は對英佛戰に一時小國を武力占領することがあらうとも、戰後それ／＼の民族には自主的國家性を與へて、その自由と獨立を保障するであらう。かくすることによつて、戰後歐州における大聯邦體制の平和維持が可能であり、ドイツを中心として彼の歐州制覇が完全なものとなるのだ。

## 世界の三分割、五分割

ドイツの英本土上陸作戦はこゝ數日の中に開始されるであらう(本文執筆の七月十日)が、おそらく英國は一時本土を捨て、アメリカ大陸まで逃避するのではあるまいか、その上にてアメリカ大陸を本據としての英米聯合軍と獨伊聯合軍との戦争行爲が、つひに長期戦となつて實現するのではなからうか。或ひは最近の歐州電報のあるものは、英米にあるユダヤ資本閥の策動によつてイギリスは其の本土拋棄以前にドイツと媾和するであらうとも傳へてゐる、だが二者いづれにしても歐州本土の戦争行爲は、

ドイツの決定的勝利によつて終熄することは間違ひない、そして獨伊對英米の長期戦如何にかゝはらずドイツを中心とせる歐州の再建は着々として進行してゐるのだ。われ／＼は東亞聯邦の建設を論ずる前に、この場合の世界情勢が如何に變化するかをまづ考へる必要がある、即ち謂ふところの東亞モンロー主義の實現も、世界の趨勢に順應して決定されなければならぬ命題であるに於いてだ。

この場合考へられるのは、世界三大聯邦ブロックの形成、又は五大ブロック體制の實現である。まづドイツの歐州制覇は當然獨伊樞軸を中心とする歐州諸國を結合する汎ヨーロッパ聯邦體制が容易に實現するとともに、アメリカ大陸へ退却せる英國は、遂にカナダと合衆國との合作を行ひ、アメリカモンロー主義を一層擴大強化して、南北アメリカを打つて一丸とする大アメリカ聯邦國家を結成する可能あることである、残る一つは日本を指導者として、滿支、タイ國、印度、印度支那、濠州、南洋諸島を包容する大東亞聯邦制の確立これである、而して、この場合のこされたるアフリカ大陸は、その地勢氣候民族勢力よりして歐州諸國のために開放せられて、その資源供給國となるであらう。これを地域と人口密度の上よりみるも、世界において最も人口過剰に苦るしんでゐるのは歐州と東洋であつて、その比率歐州一平方哩一二七、六人、アジア六五、三人に對し、北米は一七、六人、アフリ



カは一〇、六人、南米九、五人、濠州にいたつてはわづかに二、八人にすぎない。

由來國際間の戦争行爲は、殆どすべてが過度の人口増加による經濟進攻に原因することを思へば、明日の世界新秩序の創成、新らしき平和體制建設には、當然民族の數と膨脹率を基調として、地球の分割を討議されなければならぬ。

この點において、最も人口過剰に悩む歐州のために、人口稀薄のアフリカを開放すべきが當然であり日本をはじめアジア民族のためには、これまた世界最少の人口密度の濠州其他が提供さるべきである、そして南北アメリカは、アメリカそれ自身で自給自足し得る資源と地域を有し居るにおいて、これを彼が所謂モンロー主義に委し置くも可なりだ。

いま一つの場合は世界の五大分割體制であるが、これは前述の三大ブロック體制に、南北アメリカを各二つの體制とし、それに英國につぐ廣大なる領土地域を有するソ聯邦を獨立せる一ブロック單位とすることである。

ソ聯邦は共產主義的國家組織の國であるが、しかし現在のソ聯邦内部は、スターリン政策の轉回により、多分の資本主義的政策を取り入れ、現在全體主義的國家體制と大した差異なきようである、唯その對外的に標榜する世界赤化のスローガンは、日本のみならず歐米列強も恐怖嫌惡するところである。

また其の領土の歐州北部のみならず、大半をアジアに有する關係上、これを歐州聯邦、東亞聯邦のいづれよりも分離して一ブロックとすることは現實の問題として合理的であり、南北アメリカ州のことはこれを二大ブロックに分立しようとも、一ブロック單位にしようとも、それはアメリカ自身が決めればよいことだ。

いづれにしても、いまや世界の動向は、ヨーロッパを中心とするものと、アジアを中心とするものとアメリカを中心とするものとの三大勢力の潮流に送られてゐることは否定できない、これは地球上の地理的民族的關係よりする必然なる運命でもある、而してわれ々の最も關心するところのものは、このうちの全アジアブロックの結成であり、その範圍と内容の如何にかゝはるのだ。

## 東亞聯邦の範圍と政治經濟體制

全東亞聯邦の結成をなすには、まづ左の諸條件が必須缺くべからざるものとなる。

その第一は範圍であり、第二は政治體制であり、第三は經濟制度、第四は軍備問題、第五はその指導原理である。



東亞聯邦をいかなる範圍に定むべきかについては、アジアの名稱よりいへば、中部アジア、トルコ、イラン、アラビヤ半島諸國をも當然包含すべきだが、これはあまりに十七世紀的見解であらう、われわれは徒らに領土的野心を持ち、版圖の大を望むものではない、われわれはまづアジアの主要部において堅固なる聯邦制を樹立し、これらの地域に住む民族の解放と康寧をはかつてやればよいのだ。

この意味において、明日の東亞聯邦の地域は、その地勢人文民族思想よりして、西はパミール高原を中心として北方天山山脈アルタイ山脈を境界となし、この以東の印度、ビルマ、西藏高原、タイ國、印度支那、ボルネオ諸島、濠州、太平洋諸島、支那、蒙古、滿洲、日本等を打つて一丸とせるものに限定することの合理的なるを認めるものだ。

聯邦の政治體制を如何にすべきかについては、現在東亞における獨立國としては日本、滿洲國、支那タイ國の四ヶ國よりないのだから、其他の地域には當然その歐州植民地たるの羈伴より脱せしめて獨立させねばならない、而して各々の新獨立國に對しては、聯邦憲章または聯邦國家間の協定による範圍内において、獨立國としての主權を行使せしめ、立法權を有せしめて行政外交財政を管理する、その各國の政府は農業工業の諸施設、交通司法教育保健等の全般に亘りてこれを統轄する、たゞしその主權の行使が、ひとたび聯邦全體の利益を阻害する場合、あるひは一國が他の一國の經濟狀態などを甚だしく壓

迫攪亂するなどの場合は、その主權の行使に制限を加へなければならぬ。

第三の聯邦内の經濟制度は聯邦結成の主眼をなすものであるが故に、もつとも留意せなければならぬが、要するに經濟一體化の實現である。

即ち聯邦各國は、いづれも歐米資本主義の侵略を防壓し、聯邦諸國民全體の利益を増進せんがためにその經濟關係を相互依存、共存共榮の鞏帯をもつて緊結し、これを一層合理化發展せしめて、東亞の安定と解放に有利なる態勢を備へることである。

されば聯邦内の通商需給關係においては、なるべく聯邦内の自給自足を原則とし、もつて對外依存を阻止しその利益の均霑を公平ならしめ、またその經濟建設は適業適所主義をとるべく、且個々の聯邦國內においても民族別あるひは階級別に經濟上の厚薄を生ぜしむるがごとき經濟立法や制度組織をつくつてはならない。

現在における東洋諸國の經濟は、日滿兩國をのぞいては植民地もしくは半植民地的經濟であり、またその經濟的命脈は英國を中心とする歐米帝國主義の手にあやつられてゐる、歐米の資本主義的帝國主義は、事實東洋經濟上における全能の支配者である、そして彼等は、一方において東洋固有の經濟を破壊し、近代産業をその支配下に置くと共に、他面自己に有利なる限りにおいて、その封建的經濟を維持し



て東亞民族より搾取する、その恰例をわれ／＼は印度民衆ならびに支那民族の上にみることができ、抗日蔣政權のごときは、その最も有力なる歐米支配者の代理人である。

歐米勢力支配下の東洋に於いては、資源の開発も、生産の擴充も、貿易の發展も決して望めない、ゆえに歐米帝國主義を驅逐せずして東亞の解放をはかることは絶対に不可能事である。

新しい東亞聯盟の經濟體制は、この過去の事實にかんがみて、よろしく歐米資本主義模倣の域を脱して皇道經濟の原理、すなはち東亞民衆共同利益の上に立脚し、大東亞自給自足經濟圈の確立を期せなければならぬ、而して、内にありては如上の原則によつて經濟を共通にし、適所適業有無相通する綜合的經濟建設を實現すべきである。

從來歐米に行はれたる所謂經濟プロツクとは、ある一二の強大國が、自國の利益のために植民産業を決定編成し、適所適業を抑壓して獨占的利潤を收めんとしたものであつた、ゆえにこの機構の下では、輸入禁止、不當の制限、高率關稅等の偏頗なる政策がつねに繰かへされてきたが、われ／＼の提唱する東亞聯邦にとらんとする經濟政策は、かくのごとき偏頗不合理を絶対に排撃するところに、唯一の根本原理が存在するのだ。

## 聯邦における共同國防

東亞聯邦圈内においては、國防の共同がその基本條件となる、これ東亞諸民族を歐米の重壓より解放し、また聯邦の安定和平を恒久に維持するうえに缺くべからざることであるがためである。

本來この東亞聯邦なるものは、友邦獨伊によりて歐州の英佛勢力を失墜せしめたりといへども、近時露骨なるソ聯の南漸に加へて、なほ米國とアメリカ大陸に根據をもつ英國の頑存するあり、而してこれ等歐米列強の唯一の寶庫たる東亞の既得權益壟斷を排して結成せしめる以上、いついかなる場合、これ等の舊勢力の侵害に遭ふやも測られず、ゆえにこれ等の侵略勢力に備へんがためには、極めて鞏固なる共同軍備を必要とする。

しかも現實の情勢よりすれば、東亞における充實せる軍備は日本ひとり有するのみにて、滿州支那はもとより印度もタイ國も、その他諸々の植民地國もほとんど歐米に對抗すべきものなく、大部分は無防備無能力の状態である、ゆえに名は共同防衛といふも、その主力は日本が全部擔當せなければならぬ、されば東亞聯盟結成の暁においては、日本はこの聯邦全體を護らんがためには、今日より一層擴大高度化する軍備を必要とし、他の協同國は資源を提供して日本の軍備を支援補助することに努めなければならぬ。



らぬ、現在東亞の北方を守る日滿共同防衛のごときは其の一例である。

而して東亞聯邦として防衛すべきは二方面であり、その一はソ聯勢力であり、他は英米海軍勢力であること論をまたない。

ソ聯は、ロシア帝政時代より東洋に不凍港を求めること久しく、つひに日露戦争によつてその野望は粉碎されたが、未だ全く野心を捨てず極東に六十萬の大軍を駐進せしめて、わが北境に虎視耽々としてゐる。

たゞわが生命線北滿には、日滿一體による鞏固なる防備あるがために、彼は日支事變に乗じて張鼓峰事件、ノモンハン事件等によつてしばしば武力侵略を企て、あるひは度々の越境によつて日本の實力打診にとめてゐるが、その都度撃退されてゐる有様だ。

これを戰略地形よりみるも、ソ聯のシベリヤに對しては、新興滿洲國は楔の如くその中腹に食ひ込み沿海州は半月のごとく東方につらなつて、日本本土と朝鮮と滿洲國の三方より包圍挾撃せられる態勢にある、されば一端日ソ國交斷絶せば、滿洲の北方および西境より進撃する日本軍によつて、忽ちにしてシベリヤ線を切斷され沿海州は全く孤立に陥り、バイカル湖以東は日本によつて完全に占領される事態を招來する、是れソ聯が従來より日本を畏怖し、國境方面でさまざまの反撃を試みつゝも、一方にて頻

りと日ソ不可侵の締結を哀願してくる理由があるのだ。

ゆえに日本が滿洲の兵備を撤退するなら知らず、現在の防備を維持する以上は、北方の護りはまづ大丈夫とみてよからう、それよりも警戒すべきは、日本の實力に阻止されて北滿進出を一時斷念したソ聯が、その方向を轉じてソ聯領中部アジアよりイランおよびアフガニスタンを経て、印度を衝く東亞侵略である。

すでに去る五月以降のソ聯のバルカン進出も、對トルコとの親善工作もその準備とみるべきであり、七月に入つての外電は、ソ聯が中央アジアタヂク共和国よりアフガニスタンに沿ひ、延々五百キロにわたるパミール横斷路を建設中と報ぜられてゐる、かゝる場合武力を擁せざる印度、西藏、新疆は極めて危険なる情勢下に置かれることは瞭かである。

さらにまた、外蒙より支那北方奥地の所謂赤色ルートよりするソ聯勢力も大いに警戒するを要するものだ、こゝにおいてわれゝのとるべき方策としては、彼が哀訴を容れて日ソ（滿洲國をも含む）不可侵協定を結ぶも一時的便宜として可ならんも、ソ聯の侵略行爲が依然東亞に向つて停止せられざる以上東亞聯邦諸國家は、鞏固なる共同軍備をもつて彼が東亞侵出を封鎖すべき積極的行動こそ最も緊要である。



一方、海より来る東亞の外敵は英米海軍勢力である、獨伊の制覇によつて西より来る英佛海軍は無く  
なつたが、英が中心勢力をカナダに移し米國と聯合する場合、東方海上よりきたる兩國海軍を迎へな  
ければならない。

唯われに無敵艦隊の健在なるありて、現在の狀勢をもつてしては、この二國艦隊を邀撃するに十二分  
の成算あるべく思惟されることだ、要は從來の日本一國の護りのみでなく、大洋州をも包含する大東亞  
聯邦を守護せんがためには、今日以上一層海軍勢力の擴充に努めなければならないことを自覺すべきで  
ある。

## 聯邦結成の指導原理

およそ如何なる國家形成にあつても、これを結成指導する原理が絶対不可缺である、いはんや數ヶ  
國を聯盟する大東亞協同體にありては、一層これを指導する根本原理が重要である、而してこの原理た  
るや、われは名づけて王道主義といふ。

唯こゝにいふ王道とは、從來東洋の古典に示されたる哲人の政治道德觀念のそれではなく、それは日本

の皇道精神を中核とせるものであり、所謂八紘一宇天下光宅の精神であり、現在の日滿一徳一心の國家  
體制にみるがごとき東亞諸民族の統一と解放と平等と福祉と向上發展を期する政治的指導理論であり、  
文化的には、世界最古の傳統と歴史を有する東洋文化を基礎として、これに西歐文明をも融合せしめて  
更新せる東洋独自の理想的社會道義を創造せんとする文化的理念でもある。

すなはち王道とは、政治においては聯邦各國家の自覺せし民衆の理性と良心とに従へる最高價值への  
信頼と服従の關係であり、内治と外交との對立觀念を綜合統一する觀念であり、東亞民族の覺醒と統合  
を前提とする東洋的理想社會の理念である、この意味において、はじめて王道思想と日本固有の八紘一  
宇の精神とは、完全なる一致をなすのだ。

東洋最古の五千年といふ歴史と文化を有せる支那は、かつて法三章にてよく天下萬民を治定し、王道  
蕩々たる時代があつたが、幾世紀を経て現在の亂脈と衰退に陥つた、同じく印度も、かつて世界最古の  
宗教國として地上の天國を現出するたが、既に亡國の慘狀を招來し多年英國の植民地として、搾取さ  
れ壓迫され昔日の文化の認むべきものがない。この衰退と亡國の二國文化を傳承して、自の固有精神と  
融合渾成し、世界に光被すべく独自の精神文化を建設したのがわれの日本である。

ゆえに二千六百年の昔時、神武大帝によつて宣せられたる八紘一宇の皇道精神、壓迫主義にあらざる



包和主義、征服主義によらざる平和主義、偏私排他でなき社會的融合精神は、連綿二千六百年後の今日も猶、抗日支那に對する領土不割讓、損害不賠償の大乗仁慈となつて赫耀としてゐるのだ。

この日本の皇道に基く大乘精神は、滿州建國において遺憾なく發揚せられてゐる、日本によつて建國せられた滿洲國三千萬の民衆は、いまや眞の安居樂業を享受し搾取と抗爭と對立と迫害なき和協靄然たる民族生活を營んでゐる、さらに抗日支那においても、かつて抗日蔣政權に偽瞞せられたる民衆が、漸次日本の皇道精神王道理想を理解するに及んで、親日汪政權の誕生を見、四億民衆の大半は親日協和に轉向し來つて、悲しむべき二十世紀の東洋の悲劇は、かへつて日支永遠の幸福の礎石たらんとしてゐる。残るは三億八千萬の印度民族と、同じ英國支配下にあるビルマ、濠州マレー諸島の民族、佛領印度支那にある安南種族、米領フィリッピンと英ソの壓迫下にある外蒙、西藏民族の獨立と解放である。

印度は印度國民會議の決議をもつて這般その即時獨立を要求してゐる、從來武力と統制なきため英國の思ふまゝなる搾取に甘んじてゐたが、四億に近き民衆は何といつても偉大なる民族的勢力である、これを永遠に去勢し去ることは、もはや如何なる暴力をもつてしても不可能であらう。

また佛印における安南人の獨立運動も近時熾烈なるもので、日本が一觸手の援助を惜まずば、敗戦フランスは、その獨立を承認するほかはあるまい、ビルマ亦然り、濠州も英國勢力の後退により白人濠州

主義を驅逐して、濠州人の濠州にかへるだらうし、本土を失へる蘭領東印度六千萬民の獨立も、今日では單に時間の問題である、其他において、フィリッピンの獨立は既定であり、外蒙西藏族の問題に至つては、支那の完全なる建國と同時に容易に解決され得るであらう。

かく考察し來れば、いまや東はオホーツク海より西はパミール高原を一線とし、北は大黒龍江を限り南濠州ニユージランドを包含する大東亞聯邦建設の機運は急速に展開しつゝあるを知る、まさにわが建國の大理想を全世界に宣布すべき千載一遇の好機會ではないか。

われ／＼はいまぞ世界の歴史に遡つて、民族的使命に自覺しなければならぬ、かつて世界史はアジアを端緒としてはじまつた、世界文明は支那と印度より生れた、それが中世紀以後ながき墮眠をつゞけたがために、世界領土の三分一と九億五千萬の大民族を擁しながら、その百八十分の一の本土と四千六百萬の人口しか擁しないイギリス文明の制壓と支配下に苦しんできたのである。

その古き大アジアの覺醒が來たのである、民族的復興がはじまつたのである、アジアがアジア人のために解放されるときは、今日をおいてない、そしてこれをなすものこそ東洋の盟主たる日本にのみ與へられた責任である。

人々よ、この偉大なる使命と機會を認識し把握し實踐しよう、日本の偉大なる明日のために、ひろく



東方民族のために、而して普ねく人類の明日のために——。

## 米國怖るゝに足らず

去る六月六日、アメリカ大統領ルーズヴェルトは、モンロー主義に關し重大なるステートメントを發した、曰く

『米國は歐州もしくはアジアにおける領土問題については何等干渉の意志を持たぬ、しかし戦勝ドイツが、西半球にある戦敗國の領土に對し權利を主張することがあれば、我々はそれがモンロー主義の適用範圍に觸れるものなることを主張する、米國の希望し主張する處は、世界各大陸の各部分における實効的モンロー主義の適用である、故にインド支那の場合について執るべき方針としては、アジア諸國のみによつて處理さるべく、歐州に對しても同様である』と。

このルーズヴェルト聲明については、各方面に異常のセンセーションを惹起するとともに、特にアジアのことに對しては印度支那のみに限定して、蘭印其他の問題について言及しなかつたことは世界の物議をかました、それは依然たる米國の蘭印に對する利益と野望を保留せるものとして。

しかし米國の腹藏の如何にかゝはらず、また大統領のゼスチュアの如何にかゝはらず、彼が原則的にアジアのことはアジア自身に、歐州のことは歐州自身にと聲明せることは、彼が本來のアメリカモンロー主義に還元せることであり、現實的には、アメリカの歐亞干渉政策の一步後退である。

われ／＼は、日本の外交部のように、徒らに彼がゼスチュアの枝葉末節に神經を鋭敏化し、彼が腹中をあれこれと打診して鼻息を窺ふがごとき姑息兩態を斷乎排する。世界は、現實の力によつてのみ動向し決定される、アメリカがいかに思惟し希望しようとも世界の現實の動向以外には一步も出ることは出來ないのだ、而して今や歐州においてはドイツの覇業成らんとして世界に植民君臨してゐた大英帝國の勢力が一朝にして没落するとき、米國のみ獨り世界に對して勝手氣儘の干渉は許さるべきでない、それは米國自身をも、第二のイギリスたるべき運命を約束するものだ。

米國が、この際從來の歐州およびアジアへの干渉政策を抛擲して、歐州のことは歐州自身に、アジアのことはアジア自身に、而してアメリカ自らのことはアメリカのみにと主張するに至つたことは、すでに彼自身が重大なる存立危機に直面せる悲鳴にほかならない、もはや彼としては、歐亞に對する干渉どころか、自の住むアメリカ大陸を死守するに、百三十億ドルの大軍備を建設して吸々たるほかなきに至つたのである、見よ、彼はいまや世界の持たざる國の大攻圍陣のたゞ中にありて、恟々として大軍備に



専念するとともに、全米州にわたつて經濟的カルテルを提唱して、西半球に孤立せんとしてゐるではないか。

われ／＼は、われ／＼の日本が、過去においてあまりに米國を怖れてゐたことを指摘し慨嘆悲憤しなければならぬ、われ／＼の怖れなければならぬことは、却つて日本自身の内部にあつたことを知らねばならぬ。

自の實力と使命を忘失し、東洋に對する認識を缺き、イギリスの東洋における番犬的役目を光榮とし、老なるアメリカの富に眩惑して、卑賤なる商人的根性をもつて彼が勝手なる干涉政策を畏怖してゐた日本自身の内心にあつたことを知らねばならぬ。

米國怖るゝに足らず、過去も現在も將來も、日本は斷じて米國を怖るゝに足りないのだ。

かつて日米戦争が、世界の識者によつて喧傳され、日本も米國もたがひに假想敵國として憶測してゐた時代があつた、そして日本人はこれをもつて、日本の最大脅威として戰慄してゐた。

事實當時にあつては、日米戦もし開かるとせばたしかに日本の脅威であつただらう、それは米國の協同者としてイギリスが控へてゐ、さらにソ聯フランス支那のいづれもが英米勢力の有力なる追隨者であり、日本へ反感をもつ國々であつたからである。

しかし今日では、米國の最大の友人たりし英國は敗退の危機に直面し、彼の東洋における支配勢力は完全にまで消滅し、フランスはすでに一隻の軍艦も持たず、ソ聯また日本の實力に畏服して、東洋進出の方向をバルカン中央アジアに轉回せる以上、日米もし戦ふとしても、當面の對手はもはや一米國のみである。

われ／＼はこれを軍事専門家の意見に聽く、曰く太平洋を渡るものは敗れるであらうと、これが今日における世界軍事専門家の定説である。

## 米に對日戰意無し

かつて米國は支那を中心とする東洋の門戸開放を要求した、日本の滿洲建國に反對し、抗日蔣政權にあらゆる便宜を與へた、日本を假想敵國として、グアム、ウエーク、ミッドウェイに空軍根據地を設け、多數の潛艦を繋留した、日本のアメリカ州移民を排斥し、日本の軍備を對英米五、五、三にまで低下せしめ、自はアメリカは世界第一の海軍國でなければならぬ、而してアメリカの發展は太平洋の上のみであると宣言した、彼は太平洋軍備を北はアリューシャン群島から、南は布哇、ミッドウェイ、グアム、



ヒリツピン、マニラにまで連る日本包圍陣を布いた。

支那滿蒙に對するアメリカの關心は古い、この世界の新興發展國は、その進路として歐州へは進出の餘地なく、アフリカ大陸へは不便であり、のこるは獨立強國なく歐州列強の植民地化してゐるアジア大陸がもつとも恰好であつた、それにはまづアジア唯一の強國たる日本を制壓することが第一である、かくて九國條約をふくむ支那の開放、機會均等、その領土保全要求となつて現れた。

歐州において、英佛勢力が敗退せず、従つてこの二國の東洋における植民地支配勢力が後退せなかつたなら、太平洋の米國對日攻勢は緩和されるどころか一層強化されるだらう、そして彼の打倒日本、東洋侵略の痴夢は永遠に醒めないかも知れぬ。

かつてH、G、ウエルズの空想になる日米戰爭未來記は、彼が痴人の夢を語る有力なものだ、それによると、一九三五年に日本は北京天津を占領し、三六年には日本の廣東攻略がはじまり、日本は百五十萬の部隊を大陸に送る、北京、南京、武昌、漢口が爆破され日本は三度大勝を博する、しかし其の間ヨーロッパの各國は、支那に戰時禁制品を供給し、支那擁護團が東京と大阪の二大都市を爆撃し日本の三艦隊は、どこからとも知れぬ機械水雷のために襲撃される。

支那は列國の掩護により能く日本の攻撃に堪へ忍ぶ、支那の荒廢は言語に絶するが、日本の公債も下

落し農村は機能を失ふまでに疲弊する、一九三八年、日本は空しく武昌からの吉報をまつてゐるが、一九三九年一大疫病のために日本軍の大部分は南京への退却を餘儀なくされる、二百萬の軍隊のうち、よく生命を完ふしたものは數十萬を出でない、そして日本軍が南京に辿りついた瞬間に、アメリカの對日宣戰の報に接するといふ。

これがウエルズの描いた夢であるが、この夢のごとき空想はウエルズ一人のみならず、全米人も歐州の資本主義國家も、支那國民の大多數もともに空想してゐたものであつたであらう。

ゆえに英米佛の資本主義國家群は、今日にいたるまでも極端なる援蔣政策に狂奔し、蔣介石一派にいたつてはいま猶この夢想の實現を捨てないのだ。

しかし現實の問題としては、ウエルズの痴夢は一朝にして破れ去つた、日本は聖戰三年に亘つて一歩も國力の衰退を來さないのみか、日本の都市にはいづれの國の一發の爆弾も投下されない、皇軍將兵は世界戦史にその比をみざる快速さをもつて支那本土の大半を占領して餘裕綽々たるものがある、これに反して歐州では米國唯一の友邦たる佛は慘敗し盟國英は亡國の寸前に彷徨してゐる、アメリカは始めて自己の描いた虫のよい甘夢に醒めて、愕然として西半球に孤影を悲鳴せざる得なくなつたのだ。

元來アメリカは、現在も將來もアジア大陸にまで侵略するだけの民族的必要に迫られてゐない、三百



萬方哩の土地と一億三千萬の人口をもつアメリカか、無限に近い自然資源と大規模工業を有し、その富において、その生産能力において、その人口密度において『それ一國で立つ』ことの出来る國である、ゆえにアメリカは、アメリカの生存のための對外領土を必要としない、彼がヒリツピンを放棄することのできるのも其のためである。

たゞ前歐州大戰以來、無限大に築かれたアメリカの富が、何ごとにも世界第一を目指すアメリカニズムを一層刺戟し、思ひあがらせ、増上慢を來さしめ、彼の世界支配慾、東洋への干渉を増大せしめたに外ならぬ、この増上慢に冷水三斗を浴せたものは、日本の毅然たる東亞政策であり、ドイツの神速的歐州制覇であつたのだ。

もはや今日のアメリカには、對日戰の自信どころか、その勇氣すらないことはあまりにも明瞭である、日支問題、延いて全東亞の處理問題が、日米衝突の原因となるなど考へるものありとせば、それは日本の外交部に巢喰ふ一部アメリカ化された軟弱外交官のみであらう。

もしまた日米眞に相闘ふとせば、二者國運を賭しての戰であり、勝敗いづれにしても二國は慘憺たる運命に陥ること必然である。かくのごとき最大危険なる行爲が、世界の戰亂の外に超然として、世界一の經濟力と世界一の豊穰なる土地資源を有する米國の爲しうるところであらうか、アメリカの進路は、

かゝる九死一生の危険なる道を選ばなくとも、來るべき世界新體制に向つて有力なる發言權を留保し、經濟的に進出膨脹をはかることに存在する筈だ。

われ／＼は重ねて言ふ、日支問題東亞問題に原由して、米國に對日戰意なしと、ゆえに米國の干渉怖るゝに足らず、彼が制壓は斷乎として排撃し一路大東亞の建設に邁進せよと。

## 國策を諺るものは誰ぞ

『戰爭は他の手段をもつてする政治の延長である』とは、ドイツのクラウゼヴィツチの言葉である、國家としていかに國防兵力が充實し、その國民が忠誠であつても、政治的外交に機宜を失せば遂に世界の劣敗者となることは、古今の歴史がわれ／＼に教へるところだ。

ドイツ今日の輝かしき戰果も、そのすべてがドイツの兵力でも優れた科學兵器でもない、戰前ヒツトラーの卓越せる外交的勝利が、ドイツ今日の榮冠を築いた、試みに彼が對英佛開戰までの對外策をみるなれば何人と雖も軍事に先行せる外交の勝利を痛感せずにはゐられないだらう。

すなはちオースタリヤ、チエツコの無流血併合、獨伊樞軸の緊密化、突如たる獨ソ提携の現出等こそ



戦前すでに政治的に英佛に優勝せるものであり、爾後の軍事行動を安固ならしめたものであつた。しかるに、世界一の忠勇なる將兵と、世界一の光輝ある國體と、世界一の誠實の國民を擁して、古來百戰百勝、しかもその結末に於いて常に外交に敗退して折角の戦果を犠牲に供して來たのが日本の現實である。

われ／＼は日清日露役におけるわが外交の失敗をいまさら繰返して言はない、しかし聯盟脱退當時より滿洲建國へ、さらに日獨伊防共協定より日支事變、第二次世界戦の今日に至る間の、わが外交の不振失態にいたつては、眞に痛恨骨に徹するものがあるではないか。

人々は、いまになほ彼のジュネーブ會議における四十二對一の日本の惨敗を忘れ得ないであらうが、當時ソ聯は日本に對して日ソ不可侵協定を希望すること多大にして、日本がもし不可侵協定さへ結めば彼は北鐵買収も北樺太の石油權もカムチャツカの漁業權も讓渡するのみならず、滿洲國の承認も否まない情態であつた。

事實その頃わが内田外相と駐日トロフヤノスキー大使との間に交渉が進められ、いよ／＼正式に協定せんとするドタン場に至つて、日本政府は何故か之を拒絶した、その理由とするところは、〇〇の反對によると傳へられるが、滿洲建國に多大の犠牲を拂つた〇〇が、その滿洲國承認に反對すべき筈なく、

これも日本の上層部における英米心酔者の反對によつて、無方針なる日本外交部が絶好の機會を逸し去つたものとみるべきだ、もし當時日本が、ソ聯によつて滿洲國の承認を得てゐたなら、ジュネーブ會議はあゝまでも惨敗は喫しなかつたであらう。

踏阻遂巡優柔不斷はこのみでなく、日支國交調整の上にも禍してゐる、即ち日支事變前の南京交渉において、日本が斷乎たる態度で臨んでゐたならば、當時の蔣政權をして斯くまで抗日政策をとらしめ遂には日支交戦といふ最大悲劇を惹起せしめずに済んだであらう。

中國々民は、日本をもつて唯一の侵略者のごとく考へてゐるが、元來支那の侵略者は日本でなくて英國であつたのだ、租借の名によつて支那の要地を奪取したのも、支那に海軍根據地を設けたのも、不平等條約を強要せるも、領事裁判權を獲得せるも、而してかの阿片戰爭を起したのも、すべて英國であり英の資本主義的帝國主義であつたのだ。

されば支那における排外運動は、はじめまづ英國に向けられてゐた、それがいつしか排日運動に轉化させたのである、この責任者は誰か、勿論支那政治家の認識不足もある、英國外交の老獪なる策動もある、しかしながら最大の責任者は日本外交の無能無定見に存在したことを認めざるを得ない。

さらに日獨防共協定後における日本外交の無能力にいたつては論外の沙汰である、歐州の情勢が明日



の爆發點にまで切迫し、世界は日本の東亞政策と相まつて、一大轉換をなさんとしつゝある眞に分秒を争ふ危局にあるにかゝはらず、五相會議三三會議と小田原評定に徒消し、一年ちかき歳月と七十何回の會議の結果遂に何等の結論に到達し得ず、自ら時局を複雑怪奇なりと稱してその不明を表白して退場せる平沼内閣の無責任と無定見に、誰か呆然たらざるものがあらうか。

つぎの阿部内閣に至つてはさらに一層の無力外交であつた、口では對外白紙還元、事變處理に専念すると號したが、その白紙還元は日獨伊協力關係の解消英米追隨外交への墮落であり、歐州戰不介入は折角の興亞聖業を却つて消極化せしめ、列強の援蔣行爲をますます増強せる結果を招來し、何等事變處理に役立たなかつた、無能力無定見かくのごとく、つひに議會にすら臨みえず倒壊し去つたのは、むしろ當然である。

われ／＼は、米内内閣に對しては、ことごとく無氣力無定見なりとは言はぬ、たゞしこの内閣の外交主腦者は、かつての南京交渉に軟弱もつて蔣介石の輕侮を買ひ、支那をして抗日の一途に馳らしめ、平沼内閣では七十幾回の外交國策會議の結果、成算得るなく退陣して、所謂世界のバスに乗りおくれた有田八郎君であることを知る。

見よ、聖戰三年にしていまなほ蔣抗日政權の頑存し、歐州激變による世紀的世界轉換に際して、依然

踏踵逡巡、歐米追隨外交に終始して、わが獨自の東亞政策を確立し得ざることを。

## ソ聯封鎖と日獨伊同盟

何といつても歐州戰亂の勃發は、日本にとつての神風である、而して英佛陣營の敗退は、一層これを裏書するものだ、日本の東亞政策のためには、所謂千載一遇の絶好機會がめぐまれたのである。

しかし絶好の神風の機會も、いたづらに遲疑逡巡、右顧左眄してゐるとき、天來の機運もいつしか逃げてしまふ、日本外交の無能はすでに幾度かこれを逸し去つた。

歐州不介入聲明ごとき、洞ヶ峠式消極聲明は、世紀の龍兒躍進日本の斷乎排撃すべきものだ、獨英開戰當時日本として何よりも必要であつたのは、その旗幟を明瞭にして積極的に世界改造陣營へ参加することであつた、元來東亞新秩序建設とは、この世界大改造の前提として起されたものでなかつたか、この勇氣と認識と果斷と聰明なくして、何の興亞聖戰ぞや、何の人類解放の義戰ぞやだ。

當時日本外交部に、世界を達觀する明あらば、直ちに日獨伊樞軸を強化し、急遽日ソ不可侵協定を結んでソ聯勢力を近東バルカン中央アジアに向はしめ、もつて東西より英佛權益を極東より放逐し、その



援蔣政策を根絶して一擧に日支事變を終熄せしめるか、あるひは英佛と結んで日本のために彼が援蔣策を抛棄せしめるかであつた。

しかるに日本はその何れをも爲し得なかつたのみならず慢然不介入を聲明して今日に及んだ、これがためにソ聯英佛よりの援蔣は依然跡を絶たず、昨今やうやく歐州戦局の變化と、軍部の強硬決意に促されて、英佛に對し援蔣ルートの禁斷を協定せしめるに至つたが、日本外交部の優柔不斷はたしかに事變解決を一ケ年以上も遅延せしめてゐることは事實だ、しかも猶ルーズヴェルトが一言聲明を發すれば、そのゼスチュアの枝葉末節にまで神經と尖らし、彼が意嚮打診に媚態嬾々たるは、何たる陋態であらういま本論を草しある時（七月十四日）米内内閣は遽然として舉國強硬外交策を決定せりと傳へられたこれ逐日増大する無能外交排撃の國民の聲におびえたる結果か、然し本心に根深く歐米追隨の意識を藏し、しかも餘命幾何もなきこの内閣に、果して對外強硬策をとり得るや否やは頗る疑問だ。

もとより日獨伊樞軸を一層強化し、東西相携へて英米支配勢力を驅逐することは今後さらに必要なるべきも、一部に傳へられるごとく、獨を介してソ聯と提携するときは、今日にいたつては既に遅く絶對に不可である。

元來、獨ソ提携なるものは、一時の便宜主義より出でた權道的行爲であつて、王道的正義でない、從

來ソ聯のコミンテルンを指して『世界のベスト』なりと指彈してゐたヒットラーが、急にこれと協同するに至つたことは、彼が英佛勢力打倒の上における止むなき臨機的手段であつた、當時日本が日獨軍事同盟提議を受諾してゐたなら、おそらくこのことはなかつたであらう。

日本も當時奇道を歩んで事變の急速解決を企圖するなら、ドイツの斡旋によつてノモンハン停戰協定をする際、一步を進めてソ聯と不可侵協定を結び、その援蔣行爲を抛棄せしめて、彼が勢力を東歐バルカン方面に轉回せしめ、この方面より英佛陣營を脅かしめる方法はあつた、これ單に日支事變のみを急速に解決せしめる上における、たしかに奇策であつたであらう。

しかるに、當時平沼内閣は、漫然復雜怪奇なる標語をのこして退場したのみで、無爲無策に終始し、ために依然ソ聯英佛各國よりの援蔣行爲を阻止し得なかつた、阿部内閣然り、米内内閣また同斷であるだが今は場合が違ふ、時日において一年を経過し、當時の英佛支配勢力は一朝にして凋落し、日本は單なる日支國交調整より百歩を進めて、いまや大東亞聯邦を結成して其の盟主たらんとする、正に國運の大飛躍時に逢遭してゐるのだ、この千載一遇の好機にあつて、一年以前の舊世界觀をもつて對外策を議するが如きは謬れるも甚だしいものだ。

見よ、この一年間におけるソ聯の對外行動の如何なりしかを、一時は各國勢力の包圍陣内にあつて手



も足も出ず、トロツキイ的世界革命、レーニン遺訓の世界赤化政策のうえに一大修正を加へて一國社會主義獨裁に専念してゐたスターリンは、歐州の大動亂に乗じて忽ち本來の世界共産化に還元し、思想戦と武力戦を併用して、世界的火事場泥棒を働きつゝあることを。

ドイツとの協同によつてポーランドの一半を獲得した彼は、ついでフィンランドの一部を掠奪し、エストニア、ラトヴィヤ、リスマニア三國をも強制に併呑し、バルカンに進出してはルーマニヤよりベツサラビヤを奪ひ、中部アジアよりイラン、アフガニスタンを経て印度侵略の態勢をとり、また一方にペーリング海峡方面に兵備を増強して、北太平洋にも暴威を振はんとしてゐる。

もしこれ以上ソ聯の思ふまゝなる跳梁を放任せんか、世界は昨日までの英米資本主義的搾取より一層大なる脅威と迫害を、世界の共産化の上に見なければならぬだらう、北國の寒帯に封鎖されてゐた赤魔は、世界の中央に飛び出して來たのだ、彼の今日希望し目的としてゐるのは、往年の旅順大連等の不凍港でなく、黒海の完全支配であり、地中海への進出であり、東洋に對しては印度の併呑であり、シンガポールの獲得であるのだ、北滿よりのソ聯侵略のみに心を勞してゐた日本は、さらに西方よりのソ聯侵略に、新たなる關心を持たなければならぬ所以は實にこゝに存する。

われは、日ソ國體の相反し相容れざることや、その世界赤化政策の如何に恐怖すべきものなるこ

とを、いまさら説く必要はなからう、それは既に日本人のみならず世界人類の九割までが認識し畏怖してゐることだからだ、たゞ現實の問題として然らばこの既に襲撃しつゝある赤魔を如何に防止すべきか如何にして絶滅すべきかを急速に考慮しなければならぬのだ。

それには、何よりもまづ日獨伊防共樞軸を一層強化し、これを軍事同盟にまで進展してソ聯を三方より撃退し、地球の北隅に封鎖し去ることである。

ドイツは一時對英佛作戰の便宜上ソ聯と提携したが、ソ聯の北歐進出やバルカン侵略によつてみるもこの提携の永久ならざることには瞭であり、イタリイはもとゞソ聯とは絶對相容れざる立場にあり、ソ聯のバルカン工作がさらに積極化すれば、伊ソ衝突は必然である、日本また然り、さらにアメリカも近時ソ聯の北太平洋軍備に對し多大の脅威を痛感してゐるのである、かく觀きたる時、世界の何れの國と雖も、この世界最大の侵略者に對し恐怖せざるはなく、之を封鎖し窒息せしめることは、世界恒久平和のために絶對不可缺の條件とすべきである。

わが幕政當時の北海侵略より日露は多年の宿敵である、假りに滿鮮國境方面で日本と不可侵協定を結び得ても、彼が西方より印度を侵し、西藏新疆より支那の蠶食を企てる以上依然彼はわが永遠の敵である、それと同時に彼こそは、今や世界の敵であり、全人類に對する平和攪亂の公敵である、日本は東亞



新秩序建設のためにも、更に汎く世界平和體制創建のためにも、決然として對ソ國策を更改し、列國と協同して彼を北極に完封し終るの行動に出づべきである、而してこれが中心勢力となるべきは、あくまでも日獨伊防共同盟の力に俟たなければならぬのだ。

## 日本よ、さらに前進せよ

いまや全世界には、歐州を舞臺として、新たなる世界史の展開が開始されようとしてゐる、世界赤化のために鋼鐵のごとき意志を持つスターリンと、大英打倒のために果敢熱火と燃ゆるヒットラーとの二人の超人によつて。

この二者の行動が、はたして王道を歩むものか、權道邪道を行きつゝあるかは言ふべき限りでないがたゞ世界はこの二人の一步前進ごとに、古きものは踏み破られ、新らしく建設されつゝあることは事實だ、この現實の前には、世界一の海軍力と、世界一の富を有するアメリカさへも、空しく西半球に後退して窒息することを餘儀なくされてゐる。

しかるに、彼等より數歩を先んじて、東洋に王道理想郷を建設すべく發足した日本のみ、獨り牛歩

遅々たるは何の故ぞ。

所謂日滿支の互助連環による共存共榮もよい、日支同種同文種族の善隣友好もとより缺くべからざるものだ、しかし八紘一字の建國の理想と大使命を負托せる日本および日本人は、もはやこれのみで使命の達成に満足すべきでない。

眞にわれ／＼の目指すところは、全東亞の歐米支配よりの解放である、大アジア理想郷の建設である而して世界に向つて皇道日本の世紀の宣布である。

もちろんこのために日支事變の解決を弛緩させてはならない、日滿提携をゆるがせにしてはならぬ、すなはち全東亞の聯邦も、日滿支の三國結合勢力を中核とすることによつて、始めて實現され得ることだからだ。

日本は皇道の國である、仁と徳によつて立てる國である、而して其の權化が日本の皇室である、されば徳の所有者は、敢て他國の領土を欲しない、唯人類の解放と平和のために犠牲となる。

日露戦争は、ロシアの東洋侵略に對する解放の戦であつた、滿洲建國も三千萬東洋民族解放のためであつた、而していまやさらに支那四億民衆を、歐米の赤化勢力と資本主義的搾取より解放せしめんがために戦ひつゝあるが、われ／＼の東洋には猶この外に三億八千萬の印度民族と、さらにヒリツピン、印



度支那、マレイ、ボルネオ、漳州を通じて一億を越ゆる東亞民族が、歐米白人の搾取迫害に畏怖して日本に解放をもとめてゐることを忘れてはならない。

日本人よ、すべからず世界の地圖をひらいてアジアとヨーロッパのかたちを見よ、名は東洋と西歐に區分せるも、すべては一團となつたアジア大陸ではないか、白人の住むヨーロッパとは、このアジア大陸の一半島に過ぎないのだ、しかるにこの大陸をあげてヨーロッパの支配下に甘んじることの、如何に天の攝埋に反くことになるかを知れ。

神のものは神の御手へ、アジアのものはアジアに還せとわれは要求する、而して歴史以前にかへり、パミール高原を境界としてわれわれはわれわれの東亞の樂土を建設し、十億民族の安居樂業の土地たらしめんと欲する、これが全東亞聯邦結成の理念であり目的である。

帝國主義的搾取より皇道的解放へ——、アジアの土地のアジア人への解放——、アジアの資源のアジア民族への活用——。而して全アジア民族の絶對自由と平等を——。

この稿終つてペンを擱く時、果然米内内閣は軟弱外交の責を負ひて桂冠し、新たに第二次近衛内閣が生れた、公は現下國內新體制結成の中心人物であり、外相はかつてジュネーブで四十二對一の惨敗を喫した松岡氏である、學國對外硬の叫び滔々たるに鑑み、この二者を推進力とする新内閣が、果して如何なる外交國策を遂行するか、もとより今日以後に徴さなければならぬが、冀くば吾人の言を他山の石として、國民の要望に應へられ解放より建設への一大國是を定められんことを囑望に堪へず。(七月十八日、附記)

### 東邦電氣株式會社

#### 和歌山支店

支店長 辻川 眞一

和歌山市岡山町

和歌山での

お買物は

### 正 良品の丸正へ

#### 丸正百貨店

和歌山市本町二丁目

### 和歌山信用組合

専務理事 太地五郎作

和歌山市本町二丁目

時局認識の近道

### 文化ニユース館

千田 登

和歌山市築地



資本金壹千五百萬圓

### 丸善石油株式會社

取締役社長 松村善藏

營業所 大阪市北區會根崎上  
四丁目六八

株式會社

### 竹中商店

社長 竹中源助

本社 大阪市東區北久太郎  
町二丁目  
支店 和歌山市三木町

### 紀南無盡株式會社

本社 和歌山縣田邊町  
支店 和歌山市七番丁

### 日本化學工業所

所長 田中茂木

和歌山市小雜賀

Y S K

### 由良精工合資會社 由良染料株式會社

和歌山市小雜賀  
電 二五五九  
三五五九

資本金壹千四十萬圓

### 和歌山紡織株式會社

取締役社長 川口義宏  
專務取締役 南俊一  
本社 和歌山市傳法橋南ノ丁

合資會社

### 西本組

本店 和歌山市小野町三丁目  
支店 東京、大阪、京城、  
新關、上海

土木建築  
鑛業

### 原正組

社長 原庄右衛門  
本店 和歌山市小野町二丁目



資本金四千二百五十萬圓

株式會社 中山製鋼所

社長 中山悅治

取締役 小泉米藏

本社 大阪市大正區船町三番地  
支社 和歌山市杉ノ馬場二丁目

輸出、絹、綿布  
晒、捺染、加工業

紀陽染工株式會社

和歌山市新内一八五

電話 一〇六八  
一一〇〇

和歌山鐵工株式會社

社長 岡崎清次郎

和歌山市南片原二丁目

電話 八四四番

和歌山瓦斯株式會社

取締役社長 廣田米三郎

和歌山市本町一丁目

昭和十五年八月卅一日印刷納本  
昭和十五年九月五日發行

志波清太郎講演集第一輯

【定價一部金二十錢】

版權  
所有

編輯者

森澤啓全

和歌山市今福五十四番地

印刷人

岡崎ム

和歌山市南汀町一番地

發行所

興亞政治經濟研究會

東京市本郷區菊阪町三十四番地



退嬰固守の日本から、躍進の日本へ！  
老年的 日本から、青年の日本へ！  
この現下の偉大なる使命に覺醒しつゝ、天才的  
國民の情熱に燃へる行動展開！！  
世界二十億人類の暗黒面に向つて明日の希望と  
光明と、解放を約束せよ  
ルツクス、エツクス、オリエンテ！ 光は東方  
よりとは誰の言であつたか  
日本よ、日本人よ、偉大なる天才民族よ！！  
時は近づけり、機は熟せり  
皇道の精神と、王道の理想を貫くために、方一  
千萬キロの南北共榮圏へ、巨人の巨歩のごとく  
前進せよ!!!